INTERVIEW

設計順序を問い直し、新しい全体の基準を見つける

増田 信吾［40期］
SHINGO MASUDA+KATSUHISA OTSUBO

［上］山口県のウィンドファーム内に建つ物見台「風がみえる小さな丘」。雲や草花が風にそよぐように、自然にひずむ鉄骨造の建物。
［下］RC2階建ての改修計画「躯体の窓」。既存開口からサッシ、カーテン、ガラス戸を庭側へずらして配置。建物と庭の関係を窓の「個数」ではなく「割合」によりつくり出す。

200年から東京を拠点に共同で設計活動を開始し、2008年「風がみえる小さな丘」と2009年「たたずむ壁」で2年連続、SD Review賞入選。若手の建築家として注目を集めていますね。卒業後、すぐに独立し事務所を構えた経緯はどのようなものですか？

明確な目的が進学や就職に見いだせなかったこと、素直に話してしまうと、もしかするとただ腰が重かったのかもしれません。とはいえ、居場所がなくなるのは嫌だったので、作業や話の場として友人5人とシェアスタジオのようなかたちで、卒業制作提出後すぐに事務所を借りました。はじめは仕事がなかったので、僕は事務所の費用を稼ぐために、風力発電所でプレゼン用のジオラマ模型をつくっていました。その際に、模型制作の手順を効率的に進めるための事柄と順序をすべて書き出していました。作業は昼も夜中もしていたので、風力会社の社長は、僕たちの模型制作の進め方とつくり方をよく見てくれていました。僕と大坪（事務所のパートナー）が、ドロップアウトというか…建築とは何かが、よくわからなくなっていたとき、「それならば、小さいものからひとつずつ、自分たちの建築を考えてみたら？」ということで設計の仕事をいただきました。それが「風がみえる小さな丘」という山口県下関市の高台に建つ、景色を楽しむ物見台です。風に立ち向かう構造物ではなく、風を享受しながら人が入ることのできる、風景全体の計画を考えました。けれど、この物見台の計画がまとまってきたあたりから、少し不安を覚え始めました。考えていることが、周りの方にどう捉えられるか。周囲の人たちとつながりたくて、SDレビューに応募しました。

処女作である住宅の塀を設計した「ウチミチニワマチ」や近作の「躯体の窓」など建築の全体ではなく、局所的な部分を発端に設計をされているようですね。

敷地の一部の設計や改修計画、ということは当然大きく関係はしていますが、全体をなんとなく新しくつくり込むのではなく、僕たちは使われ方や周囲との接し方が決定的に変わる部分を探し、設計を考えていく傾向があります。局所的に新しいことが設計できれば、周りは必然的にそれに沿うかたちで今までのプランニング全体を揺るがします。そしてそれは、施主の要望に対して真っ向から「設計」で応えることを考えた結果でもあるのかもしれません。施主が話す切実な要望の中で、こちらが設計物として詳細図まで提案できるのが「窓」だったというのが、近作の「躯体の窓」です。内装改修の依頼でしたが、敷地の半分以上が庭であるため外部と接続している窓周りを新しくしたい、という要望がありました。インテリアデザインのパターンはいくつも出せますが、「窓」という局所的な部分であれば、揺るがない何か…つまり、新しい全体の基準を設計の中で見つけられるのではと考え、施主に説明しています。僕たちの提案は、既存開口からサッシ、カーテン、ガラス戸を庭側へレイヤー状にずらして配置し、壁面に対する窓を「個数」でなく「割合」として機能させることで、建物と庭の新しい関係が生まれるのではないかという考えです。そのため、既存躯体と庭の間に大きな窓を設計しました。閉じた箱としての建物ではなく、閉じた建物ということが、状態の一端になるのではないかと思いました。

二人で仕事をされていますが、どのように考え、また活動されていますか？

固定観念をいかに疑えるか、意識できるか、ということがとても重要に感じます。その分、設計の実務的な手順はあきらかに人より倍以上、時間がかかるときもあります。日々の動き方は、三六判の机に向かい合って長い時間スケッチを描き、二人で話し合います。はじめに出る案は思いのほか普通で、飾りのようなものはこの段階で排除され、そこからCGや模型を立ち上げて検討しています。性格の異なる者同士がひとつのことに対して話す中で、はじめて気が付くことも多い。ひとりで考えていることはかなり片寄っていますが、真逆な相手から指摘されるので、自分が客観的に見えてきます。

学生時代から現在につながる、設計に対する意識や考え方はありますか？

ムサビは学生人数が多いためか、学生の頃は他人から自分に向けられる目を意識していました。自分の居場所をつくるには、どうパフォーマンスするか？課題を通して自分の価値観や物事の見方を探すのですが、ただプレゼンすればよいというものでもなく、人格も含めて認めてもらう必要があると勝手に思っていました。そのことに大学時代は費やしたといえるかもしれません。予備校時代の経験は、現在の設計順序とつながる部分があります。僕は絵がうまく描ける人になりたい訳ではなく、あくまで指定された表現方法の中で自分なりの設計順序をいかに組めるかを大切にしていました。当然、色と色を混ぜ合わせた時にどんな発色になるかという色彩の関係、各色の絵の具の顔料の成分と粒子の大きさ、そして色の重ね順の関係、天候と距離感の関係、与えられているさまざまな前提を調べ理解しながら試し、成功したかどうか検討を積み重ねていました。物の見方と順序を問い直して揺るがない部分を見つけることは当時から僕にとって重要でした。すでにある価値観を前提に考えてしまうことで、窮屈になっている部分はないか？設計を通して、価値観をより自由にしていけたらと思っています。

増田 信吾　Masuda Shingo
建築家

1982年東京都生まれ。2007年武蔵野美術大学建築学科卒業。
2007年増田信吾＋大坪克亘として活動開始。
2009年〜現在、武蔵野美術大学非常勤講師。
主な受賞に、鹿島出版会SD Review 2008、2009入選。
ar Awards for Emerging Architecture 2009 “commendation”、
JCDデザインアワード2011金賞、
ar+d Awards for Emerging Architecture 2011 “runner-up”など。

TOPICS

“向き”を変えて、“新しい中心”をつくること

風間 貴志［42期］

“向き”を変えて、“新しい中心”をつくることはできないだろうか。

私は大学を卒業し、東京でいくつか設計事務所に勤めた後、家族の事情でたまたま高知へと引っ越すことになりました。現地で一軒家と畑を借り、地元の設計事務所に就職し設計の仕事をしながら、妻とネコ、二人一匹での生活を送っています。こちらでの仕事は住宅、病院、工場など幅広いものです。「地方も暇じゃないな」という感想を抱いています。

高知は家賃や生活費が安く、生活のベースが環境面・経済面で安定したことは、私にとって移住の大きな利点でした。こちらで暮らし始めると、次第に東京で感じていた建築の仕事と生活の間の窮屈さや不安はなくなりました。建築に対する自分の取り組み方に特に変化はありませんが、将来の生活像や、働き方については新しいイメージや選択肢を持つことができたように思います。環境が変わり自分の進む“向き”に変化が生じたことで、都市（東京）と地方の違いや、住む人の価値観の違いなどを相対的に見ることができ、双方の良いこと、悪いことがともに明快に見えてきました。その良いことをうまく活かして混ぜ合わせたとき、新しく自分なりの発想ができたわけです。

私の周りでも同じように進む“向き”を変え、環境の違いを利用し、個性的な生き方を始めた人たちがいます。私にはそれらが魅力的でかつ求心力を持った“新しい中心”になっていくのだろうと思えてならないのです。

風間 貴志　Kazama Takashi
会社員（建築設計事務所勤務）

2009年武蔵野美術大学建築学科卒業。
卒業後はカタセデザイン株式会社、
life and shelter社に勤務。
2012年東京から高知へ生活の拠点を変え、
現在、高知の設計事務所に勤務。

［上］築50年程の、知人宅の改修を行った。
［下］移住者を集めて催された餅つき大会の様子。

INFORMATION

＊昨年度受賞者による賞

2013年度日月会企画イベントの報告

小林 敦　Kobayashi Atsushi　［18期］

4月20日｜フォルマ・フォロ セミナー第8回
「小さな家の幾何学」
長尾重武（本学建築学科教授）
対談：鈴木明（神戸芸術工科大学教授／10期）
「小屋」は、現在、エコロジカルな視点からも注目を浴びる建築のひとつ。建築史を専門とする長尾先生ならではの観点から語られる「小屋」は、洋の東西を越えて、その存在意義をあらためて考えさせるものであった。

7月6日｜日月会建築賞
太陽賞：「探索の棚 継承の棚」野口友里恵
満月賞：「INOKASHIRA RUNNING STATION」阿部直人
三日月賞：「The space of unit’s bamboos」立木真央、梅澤昌平、小林総司
新月賞：「積層する地図」池川健太
七夕賞＊：松本麗桂子「よく沿う、よくそう」
審査委員長：小倉康正　審査委員：池野秀基、石原信、下村治子、清水隆之、佐藤恒、鈴木竜太、井口雄介

9月7日｜フォルマ・フォロ セミナー第9回
「ムサビキャンパスの変遷と建築そして教育の現場」
宮下勇教授（本学建築学科教授）
対談：小倉康正［18期］
建築学科1期生でかつ本学教授でもある宮下先生がこれまでに関わった鷹の台キャンパスの計画を語られた。キャンパスの変遷や教育活動は、今年設立50周年を迎える建築学科の歴史そのものといえる。

10月26日｜日月会シンポジウム第4回
「学生時代に取り組んだ『課題』を通して」
パネラー：山本幸正［7期］、井上瑤子［11期］、青山泰之［14期］
司会：小倉康正［18期］
激動の時代を学生として過ごした彼らの作品をみて「社会や文化の一形態としての建築」という概念を改めて考えさせられた。

ご挨拶

酒向 昇　Sako Noboru
日月会会長［21期］

日月会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝でご活躍の事と拝察いたします。執行部会の承認をいただき、平成25年4月より会長を務めさせていただくことになりました第21期卒業の酒向昇です。3,000人を超える卒業生を擁する同窓会の伝統と歴史を考えますと、その責務の重さを痛感いたしますとともに、身の引き締まる思いがいたします。更田前会長が整備された活発な同窓会活動を引き継ぎ、フォルマ・フォロセミナー、日月会建築賞、ホーム・カミング・デイ、日月会シンポジウム（日月進歩）、進路相談会、会報、HPなどの円滑な運営に努めて参ります。新執行部一同、母校建築学科と日月会発展のため、微力では御座いますが力を尽くす所存で御座います。皆様のあたたかいご支援・ご協力をお願い申し上げます。

武蔵野美術大学建築学科は、前回の東京オリンピック開催年である昭和39年に創設され、平成26年度には設立50周年を迎えます。学科の50年は歴代先生方と私たち卒業生がつくり上げた歴史であります。本年9月には学科研究室と一体となって、発起人を募り、記念式典・記念出版などの催事を計画しております。

日月会では平成22年より日月会シンポジウム（日月進歩）と称し、多方面で活躍されている日月会会員の方をお呼びして、ミニレクチャーとシンポジウムを開催し、さまざまな切り口から卒業生の多様性を探って来ました。建築学科設立50周年を機に、過去4回に加え、今後2回予定されているシンポジウムを通し、日月会の50年を紐解き、これからの発展を予感する冊子の発行を目指しています。さらに、昨年から若い方の同窓会活動への参加を呼びかけ活性化を図り、50周年記念事業実行委員やボランティアの方を選任、催事準備を進めております。第1期卒業生である宮下先生の御退任に象徴される、半世紀という長い歴史を築いてきた武蔵野美術大学建築学科を、さらに盛り立てて行きましょう。

「武蔵野美術大学造形学部建築学科設立50周年記念事業」のご案内

建築学科は2014年の今年、設立50周年を迎えます。これを記念して、建築学科研究室の主催、校友会の後援によって記念事業が企画されています。主な事業内容としては、記念講演会や記念祝賀会、また記念冊子の発行など、現在準備が進行中です。日月会は共催することで研究室をサポートし、会員のみなさまとともに建築学科設立50周年を精一杯盛り立てたいと考えています。記念事業へのみなさまのご協力及び、ご参加をどうぞよろしくお願いいたします。

なお、詳細については随時研究室ウェブサイトまたは日月会ウェブサイトにてお知らせします。
日程：2014年9月20日（土）午後
会場：武蔵野美術大学鷹の台キャンパス

MAU Architecture 50th Anniversary

ロゴデザイン／根間太作［30期］

表紙写真
「躯体の窓」（2012年計画現在施工中／千葉県）。窓の持つ機能を新たに設計した。インタビュー参照。（写真提供＝SHINGO MASUDA + KATSUHISA OTSUBO）

編集後記
増田さんと風間さんに活動のみでなく日常のことも伺いました。建築を見るうえで建築家がどんな人かを知るのは楽しい事と感じます。建築と意味と人柄の関係性に注目しています。［am］

編集：尾内 志帆、雨川 美津季
デザイン：松井 雄一郎＋長尾 周平
印刷：株式会社山田写真製版所
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
http://www.nichigetsukai.com
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内

Forma-Foro

14

フォルマ・フォロ｜武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2014｜VOL.14

FEATURE

8号館3階の空間利用の変遷を辿る

文＝尾内志帆（本誌編集担当）

2014年度、設立50周年を迎える建築学科。その記録として、8号館3階の空間利用の変遷を振り返ってみたい。

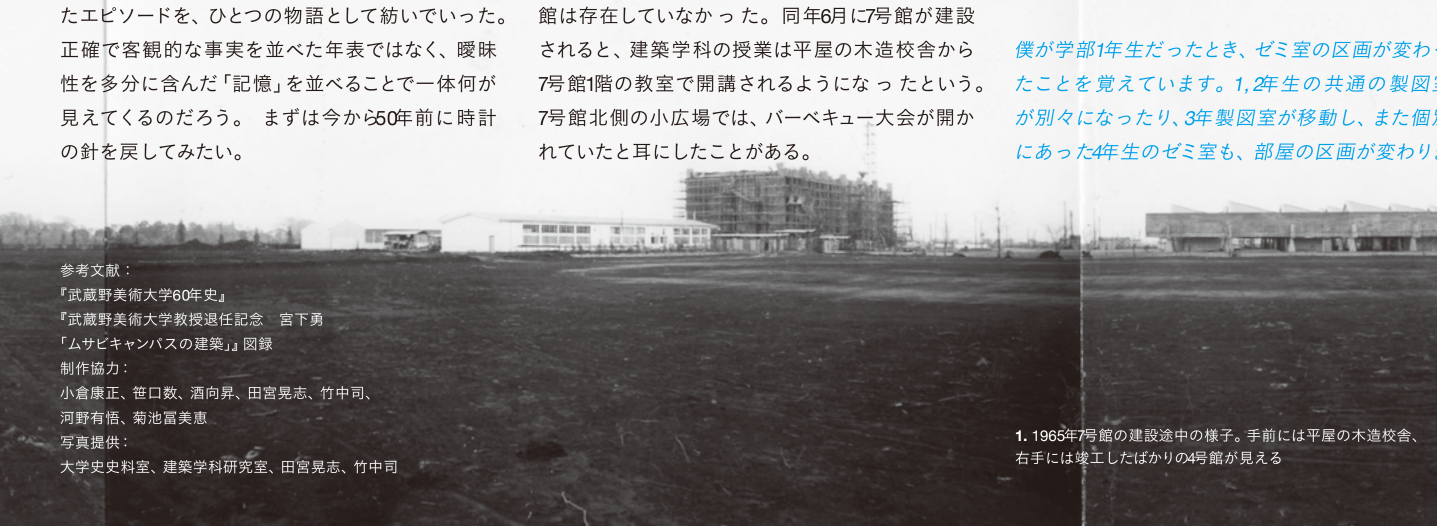
筆者は、2006年に卒業した第39期生にあたる。毎号、この小さな媒体を発行するにあたり、掲げてきたコンセプトは、世代を越えて何を「メディア」に同窓生同士がつながることができるのか、ということだ。今号は、その「メディア」を8号館3階の空間とした。

ここに綴る文章は、幾人かの同窓生から得たそれぞれの語りをもとに構成されている。筆者の問いかけから一人ひとりの記憶を掘り起こし、集まったエピソードを、ひとつの物語として紡いでいった。正確で客観的な事実を並べた年表ではなく、曖昧性を多分に含んだ「記憶」を並べることで一体何が見えてくるのだろう。まずは今から50年前に時計の針を戻してみたい。

広い平地だった頃

建築学科が誕生したのは、1964年4月のことである。造形学部産業デザイン学科建築デザイン専攻が開設されたことが始まりだ。学生数は40名、主任教授は芦原義信先生だった。当時の鷹の台キャンパスは、本校舎建設前の木造校舎（プレハブ建築のような）が建ち並び、周辺は畑やまっさらな平地が広がっていた[1]が、同年8月には4号館が建設された。

翌年1965年に学科として独立。造形学部建築学科となり、華々しいスタートを切ったと思いきや、じつはまだ、設立当初の鷹の台キャンパスに、8号館は存在していなかった。同年6月に7号館が建設されると、建築学科の授業は平屋の木造校舎から7号館1階の教室で開講されるようになったという。7号館北側の小広場では、バーベキュー大会が開かれていたと耳にしたことがある。



1. 1965年7号館の建設途中の様子。手前には平屋の木造校舎、右手には竣工したばかりの4号館が見える

参考文献：
『武蔵野美術大学60年史』
『武蔵野美術大学教授退任記念　宮下勇「ムサビキャンパスの建築」』図録

制作協力：
小倉康正、笹口数、酒向昇、田宮晃志、竹中司、河野有悟、菊池冨美恵
写真提供：
大学史史料室、建築学科研究室、田宮晃志、竹中司

2. 1974年3月当時の8号館の外観。左手奥には鷹の台ホールA棟

可変性の高い建築設計

1969年6月、芦原先生設計のもと、ついに学び舎となるデザイン棟（現8号館）が竣工した[2]。建築学科研究室は3階の現位置に置かれ、学生定員も80名に増えた。同フロアは、基礎デザイン学科と共有しており、フロアを半分ずつ使うようなかたちで授業が行われていたという。しかし一方で、校舎の建設と同時に芦原先生は退任となった。

その後、1973年には大学院造形研究科（修士課程）デザイン専攻建築コースが開設された。当時の授業の様子については記録写真が多くを物語る[3,4]。

70年代から80年代までは、空間の大きな変化は見られない。しかし、3階フロア内での教室配置の変更はたびたびあったようである。小倉康正さん［18期］は、学生だった1981年当時を次のように振り返る。

僕が学部1年生だったとき、ゼミ室の区画が変わったことを覚えています。1,2年生の共通の製図室が別々になったり、3年製図室が移動し、また個別にあった4年生のゼミ室も、部屋の区画が変わりました。当時はすでにいらっしゃらなかった先生方の空き部屋などを整備したためでしょう。長期休暇中の工事だったのか、休み明けに大きな変化はないものの、どことなく空間全体の雰囲気が変わったと新鮮に感じたことを覚えています。（小倉）

3. 1977年製図室の様子

このような教室配置の変更は、8号館の部分ごとで時代の流れを反映するかのようにたびたび実施されていたようである。教授陣の入れ替わりによるゼミ編成の変化や、カリキュラムの変更なども各教室の利用方法を変える要因のひとつといえるだろう。小倉さんの記憶している1981年の4年生ゼミ室の配置変更には、使用されなくなったゼミ室を整備し、一つひとつのゼミ室を広くするなどの目的も果たされた。こうしてその都度合理性の追求が行われ、空間利用の変化が見られるが、それも8号館が可変性の高い空間として設計されていたためといえるだろう。

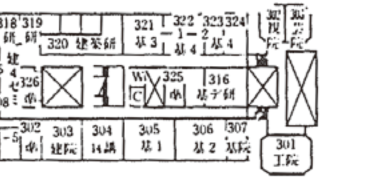
1981–1982年
1981年から1982年にかけて、10号館の建設によって学内の教室移動があり、8号館3階もその影響を受けている。基礎デザイン学科が出て、生活デザイン学科が入るときには、建築学科の1年と2年の製図室を個別にするなどの変化が見られる。

4. 1977年竹山実ゼミの授業風景

時代を反映する空間利用

1980年代のエピソードを集める中で、特に興味深かったのが「展示スペース」の名称をめぐるものだった。いまでは当たり前のように「展示スペース」と呼んでいる吹き抜け横の空間に、別名があったのだ。酒向昇さん［21期］から、名称公募の経緯について聞いた。

1981年教室配置図



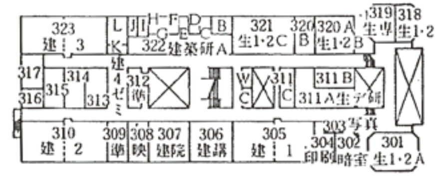
24期以降、制作模型が巨大していく傾向にあったようです。その影響のためか、課題提出場所を保管庫から現在の「展示スペース」へと変更することとなり、まだ「展示スペース」という名前がなかったため、研究室から名称の公募がありました。そこで採用されたのが、公募の前年度に卒業した“怪人”浅葉忠志［19期］の名前を冠した「浅葉ルーム」でした。その後、利用内容とまったく無縁な名前が使いにくく、自然と「展示スペース」に変わっていきました。（酒向）

「展示スペース」は、いまの半分程度の渡り廊下を広くしたような細長い場所であった。それでも、次第に講評会や展示活動、さらに模型提出の場所としても使われるようになった。その転換期にあたるのが、ちょうど24期頃だという。24期の田宮晃志さんはこう話す。

たしかに、模型の巨大化に関しては、僕たちの代から大きくなったことは事実です。きっかけは2年次後期、早川＋富永両先生の宮下公園を敷地にした「公園にたつ小美術館」の課題だったように思います。1:100の模型提出の条件でしたが、僕と何人かが敷地の宮下公園を含めてつくったため、当時保管庫で模型を収容するはずができず、教室か研究室で回収となりました。

その際に講評会で模型が大きいだけで説得力を増すことをなんとなく皆が感じたのではないでしょうか。次年時の長尾先生による「武蔵野美術大学青梅キャンパス計画」（3年前期）[5]、竹山先生の「青山計画」（3年後期、選択課題）、同じく竹山先生のアンコールワットを敷地とした「NIAEの国際コンペ」（4年前期、グループ課題）と徐々に模型のスケールが大きくなり、小宮山＋竹山両先生の「佃島バザール」（4年後期）の課題では、ついに6畳ベースに高さ1.4m程度のもはや移動不可能の模型をつくっていました。（田宮）

1982年教室配置図



5. 1989年「武蔵野美術大学青梅キャンパス計画」で制作した模型

時代とともに、設計課題も変化していくのは当たり前であるが、このような模型の巨大化がその後保管庫の増設などを実施するきっかけとなったことは確かであろう。

教室の配置が変わるとともに、内部設備も充実化していくことになる。いまでは到底想像できないが、2000年以前まで8号館の設備には冷房がなく、暖房としては壁際に「ラジエーター」を設置し、中央機械室（現2号館の場所にあった建物）の中のボイラーから供給される蒸気を熱源にしていたのだという[6]。8号館3階の空調は、1996〜2002年の間に整備された。当時の様子は菊池冨美恵さん［34期］が詳しい。

私が学生だった90年代後半は、教室には壁側の暖房器具しかついておらず、冬場はお尻をつけながら講評を聴くなどして寒さをしのいでいました。一方で夏場は冷房がないため蒸し暑く、スチレンボードをあおいで生活をしていました。念願の空調が設置され、冷暖房の完備によって快適性が上がったように思われましたが、じつは模型が乾燥するようになって不便に感じることもありました。（菊池）

1998–2002年
生活デザイン科との共有から、8号館3階のフロア全体が建築学科の専有スペースへと移行。そのため、全体的な空間利用の方針が教授陣の教室会議で話し合われた。その結果、展示スペースや研究室の拡張とともに、コンピュータ演習室（VDS）が開設されるなど、建築学科の大きな転換期ともいえる。

6. 1994年竹山先生の背後に見えるのがラジエーター

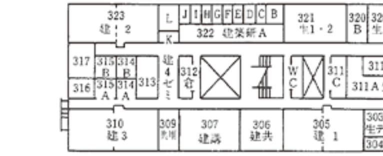
じつに建築学科ならではのエピソードである。

生活デザイン科との交流

8号館の竣工からともに3階に在籍していた基礎デザイン学科は、10号館が建設された1981年に移転。そこへ入って来たのが短期大学部の生活デザイン科だった。生活デザイン科は20年弱の間、3階に研究室を構えていた。

現在は各学科がワンフロアを使用するかたちで棲み分けが行われているが、同じフロアに異なる研究室が置かれていたことで、双方の交流はいかなるものだったのだろうか。助手として勤務経験のある小倉さんに再び聞いた。

1998年教室配置図



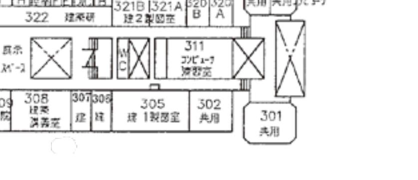
研究室の助手同士での交流はもちろん、建築学科の学生が生活デザイン科の研究室へ出入りする姿もよく見かけていました。生活デザイン科の研究室には、生活感があり、個室がなかったからか部屋にはいつも先生がいらっしゃいました。まるでリビングにお邪魔しているように居心地の良い空間でした。また、「ぎょうざの会」と呼ばれる食事会がよく企画されており、「建築法規」の授業を担当されていた白川光憲先生が本場仕込みの水餃子を振る舞われていたようで、助手や学生が参加してにぎわっていました。（小倉）

7. 1994年建築学科研究室の内部。簡素な雰囲気である

2000年の大改修

生活デザイン科は1999年に学生募集を停止。その際、3階全体が建築学科の専有フロアとなり、1999年から2000年にかけて3階の空間利用は大きく変化しているといえる。ひとつは、展示スペースの改修、もうひとつはVDSの教室の開設である。当時助手だった二人、河野有悟さん［28期］と竹中司さん［28期］から、改修計画や新たなスタートとなった裏側を聞いた。

2002年教室配置図



8. 2002年香港九龍開発計画 国際建築設計競技の発表風景

展示スペースの増改修：

生活デザイン科が抜けたことで、3階フロア全体の教室配置が検討されました。建築学科の教授陣を中心に、教室会議で計画が練られ、主に宮下勇先生のもと、当時研究室スタッフだった助手や教務補助が実働部隊として活動しました。

計画にあたり、掲示板や展示活動に使われていた展示スペースを、もっと充実させた方が良いという議論がありました。気がつくと大掛かりな工事となってきて、宮下先生を中心に色や器具を決めたり、割付を考えたり、現場監理さながらの状態に突入したことを覚えています。

また、研究室内にある教授室の面積が倍になったことや、教授室前にある共有スペースが生れたことは大きな変化だったといえます。とくにこの共有スペースは、大学院の授業や、研究室で行われているさまざまなプロジェクトの作業やミーティング、学生やOBとの交流など、これまでは感じにくかったそれぞれの活動が見えるようになったことで、建築学科全体の雰囲気に活気が出てきたように感じました。（河野）

コンピュータ演習室（Virtual Design Studio＝VDS教室）開設：

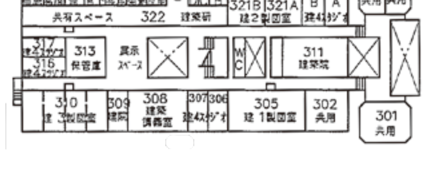
2001年度よりCAD演習 I とIIの授業を担当するにあたり、まったく新しい概念のコンピュータ教室を提案しました[8]。VDSとは、マサチューセッツ工科大学のWilliam J. Mitchell教授やブリティッシュコロンビア大学のJerzy Woitowiicz教授の提案する、新しい設計手法と環境です。提案から施行まで担当し、2001年に竣工。一般的なコンピュータの配置は並列ですが、円形で配置したことはひとつの特徴です。

授業では、場所や時間の概念を越え、さまざまな分野や国の人たちとコラボレーションをとおして、新しい設計手法を学生たち探求しました。とくに2003年の設計課題「VDSバクダッド」は、当時の社会背景のなかでも課題枠を越え、大きな役割を果たしたといえるでしょう。（竹中）

2010年–
2010年には、311のコンピュータ演習室（VDS）は大学院生専用の教室へ。また研究室では、助手専用の個室はなくなり、オープンスペースを共有するかたちとなった。この時期におけるハード面での大きな変化は少ないが、学科の教育カリキュラムの再編などソフト面によって、日常風景は年々変わり続けている。

2014年のいま、2000年の大改修の功績のひとつだったVDSは姿を消し、院生室へと様変わりした。その背景には、コンピュータが個人の所有へと代わり、ネットワークを通じたコミュニケーションが当たり前となったこと、また院生の増員がある。8号館の建築自体はきわめて簡素で変化のない空間に思えるが、空間利用の変遷を辿っていけば、空間が出来事をつくり出し、出来事が物語として語られていくという、綿々としたときの連なりが存在していた。

以上のような同窓生たちの語りは、不確かながらもおぼろげに、心の中にある鮮明な思い出を呼び起こしてくれるものであった。決して網羅的ではない情報の集め方は物足りなさを感じさせるかもしれない。その場合はぜひ、本誌を真ん中に同窓生同士と語り合うきっかけとしてもらえたなら幸いである。

9. 2000年にリニューアルした展示スペースは、研究室とのつながりが生まれ、サイコロ状のオブジェも用意されたことで、日常の空間利用が多様化した。

2010年教室配置図